中面装飾見本

本見本は、デザインプラスプラン以上でお選びいただける「中面装飾」のご紹介です。表紙の装丁（金彩の蔦・七宝つなぎ・写真表紙）に合わせて、章扉と本文の質問見出しにも、それぞれの意匠をあしらいます。

以下、装丁ごとに「章扉」と「本文ページ」の見本を掲載します。基本プランの標準組版は、公開中の一冊見本「一本の傘」をご覧ください。

※文章は見本「一本の傘」からの抜粋です。登場する人物・出来事はすべて架空のものです。

第四章

一本の傘

配偶者との出会いはどんなふうでしたか？

主人との出会いは、お見合いでした。勤め先の支店長の奥様のご紹介です。五つ年上で、電機の会社に勤めているという人でした。料亭で顔を合わせたものの、私は緊張して、ほとんど何も話せませんでした。

ところが帰り際に雨が降り出して、主人が駅まで、傘をさしかけてくれたのです。ただ、それだけの人。でも、まじめな人だと思いました。

プロポーズはどちらから、どんな言葉でしたか？

三度目に会った日です。主人が急にあらたまって、「贅沢はさせてやれませんが、雨の日に傘を持って迎えに行くことなら、一生できます」と。

お見合いの日の、あの傘のことを言っているのだと分かりました。気の利いた言葉ではないのかもしれません。でも、この人は一生こういうことを守る人だと思って、「はい」とお返事しました。実際、その通りの人でしたよ。

第四章

一本の傘

結婚式の日のことを教えてください。

昭和四十五年の秋、川越の式場で式を挙げました。その日も、あいにくの雨。母が着付けてくれた白無垢に、綿帽子が重かったこと。そして、ふだん何も言わない父が、お開きのときに泣いていたこと。あの光景は、忘れられません。

あのときの写真は、いまも茶の間に飾ってあります。

夫婦げんかはしましたか？ 仲直りの方法はありましたか？

喧嘩らしい喧嘩は、あまりしたことがありません。なにしろ主人は怒鳴るということをしない人で、腹が立つと黙ってしまう。私も意地になって黙る。そうすると家の中がしいんとして、子どもたちが「今日は静かだね」と顔を見合わせるのです。

仲直りの合図は、翌朝の味噌汁でした。私が黙って主人の好きな豆腐とわかめにする。主人は黙って二杯おかわりをする。それでおしまいです。言葉のない夫婦の、言葉のない仲直りでした。

写真表紙

第四章

一本の傘

子どもが生まれた日のことを覚えていますか？

長男の誠は、昭和四十六年の八月に生まれました。暑い日で、産院の窓からは、蝉の声が聞こえていました。

三年おいて、長女の恵美が生まれました。二人とも、安産でした。

子どもの名前は、どんな思いを込めて付けましたか？

誠は、主人が「誠実の誠」から選びました。嘘をつかない子になってほしい、と。画数の本を会社の昼休みに読んでいたそうで、あのまじめな人が辞書と首っぴきになっている姿を思うと、いまでも笑ってしまいます。

恵美は「恵まれて美しく」。こちらは私が押し通しました。名前のとおり、人に恵まれる子に育ったと思っています。